

青山教会会報

「少年イエス」

ルカによる福音書二章四一〜五二節

牧師 増田将平

「福音書」とはイエス・キリストの伝記であると思われていますが、四つある福音書はどれ一つとして主イエスの伝記ではありません。「福音」の書なのです。「福音」とは良い知らせ、グッドニュースです。福音書記者ルカは、主イエスの少年時代のある出来事に「福音」を、「良い知らせ」を見いだして収録しました。

ところが、この物語は主イエスが行方不明になることから始まります。十二歳ですからもう大人に近いと言えますが、親からすればまだ子どもです。ヨセフとマリアは三日間探し回りました。やっと息子を見つけて母マリアは言いました。「なぜこんなことをしてくれたのですか。御覧なさい。お父さんもわたしも心配し

て捜していたのです」。迷子の子どもを捜したところのある親ならこの気持ちがよくわかります。すると少年イエスは答えました。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」。実はこれが、福音書に収められている主イエスの最初の言葉です。この主イエスの言葉に、今朝の福音があるのです。

「自分の父」とはヨセフのことではありません。マリアは聖霊によって主イエスを身ごもりました。ヨセフは自分の子ではない子を、二人の子どもとして受け入れ育ててきました。そういう経緯があったとしても二人にとってイエスは自分たちの子どもでした。だからマリアは主イエスに「(あなたの)お父さん」と語りかけます。それに対して主イエスは「自分の父」と答えます。必死になつて捜し出した両親に対して随分冷たい言葉にも聞こえます。「この子は大人びてはいるが、あまりにも親心が分かっていないのではないか」。きつとそう思ったに違いありません。「イエスの言葉の意味が分からなかった」。親だからこそ、この言葉の意味が分からなかったとも言えます。

「どうして、わたしを捜したのですか」

この言い方には「本当はわたしを捜す必要はなかったのです」「わたしが誰であるか分かっていたらば」という響きがあります。両親は主イエスを見失い捜し回りました。両親は主イエスの居場所を見失っただけではありません。主イエスとは誰であるかを見失ったのです。そんな両親だったからこそ、主イエスは「私の父」と言われたのです。

「父の家」とは「父なる神の家」であり、具体的に神殿を指しています。元の言葉には「家」という言葉はありません。曖昧な言い回しの言葉なのです。曖昧ということ、どうもいくつかの意味が込められているようなのです。一つの意味は「家」つまり神殿です。もう一つは、「父から与えられた使命」という意味です。「父から神の独り子である私に与えられた使命がある。そのために、私は神殿にいる」と言われたのです。主イエスは神殿で教師たちの中にいました。議論していたのではなく、学者たちに耳を傾け、質問しています。聖書の言葉を学んでいたのでしょうか。

「当たり前」という言葉は神の意志を表します。これは少年イエスの思いつきではない、ということですが。この後でイチ

ジク桑の木に登った徴税人の話が記されます。ザアカイ。彼を見上げた主イエスの言葉はこうでした。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」。主イエスがザアカイの家に泊まるのは、気まぐれや思いつきではない、これは神の意志なのだ、というのです。そのために主イエスがこの町に来た。そのために神の子である方がクリスマスに人となったのです。「私が父の家にいるのは神のみ心であり、私は神のみ心を行うために来たのである」

主イエスはあるとき、この「神の意志」を表す言葉を使って弟子たちに言われました。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日ののちによみがえるべきことを、彼らに教え始めた」。「べき」、これが神の意志です。すると聞いたペトロは主イエスを諷めました。「あなたがいるべきところはそこではないでしょう。ここです」。十字架に向かおうとしている主イエスの居場所をペトロが否定し、指定しようとしたのです。

ペトロも両親も似ていないでしょうか。自分の思いだけで、主イエスを見ていま

す。自分が願うところにだけ主イエスを見出そうとしています。だから主イエスの言葉が理解できません。主イエスを見失います。時に主イエスは私どもの思いと異なるところにおられるのです。きっとこれは両親にとつて今回限りだけのことではなかったのでしょうか。ある人は「ここで両親が裁かれている」と言ったそうです。

しかしこの後主イエスは両親と一緒に帰り家族に仕えます。ヨセフは割合若くして亡くなったのだらうと言われます。

主は一家の長男、大黒柱として十八年間大工として一家を支えます。主イエスは三〇歳を過ぎた頃、ガリラヤからエルサレムに来て、神殿で教え学者たちと議論しました。やがて十字架にかかりました。それは過越の祭の時でした。十字架について死に、復活をなさった。それは両親たちが見失い、主イエスを見つけ出した期間と同じ、三日目のことでした。その後主イエスは天に昇られました。地上での使命を果たされたのです。文字通り、父なる神の家に戻られました。しかし父なる神から与えられた使命を今も果たしておられます。ルカはこのような主イエスの言葉を記しました。「求めなさい。そ

うすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる」。求めるとは、誰に求めるのでしょうか。「父なる神に求めなさい」と主イエスは言われます。私どもも主イエスのように神様を「天の父」と呼ぶことができるのです。主イエスが十字架について死なれ、父なる神の力によって復活させられたのは、自分の願いだけを求め、神様を見失っている私どもが、主イエスを見出し、天の父なる神の子どもになる道を切り開くためです。「求めよ、探せ」と言われた主は続けてこう言われました。「あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」。ここにも親子の話が出てきました。父なる神は私どもにも最も良い物を与えてくださいます。それが聖霊です。聖霊が与えられたらどうなるのでしょうか。聖霊の助けによつて、私どもは神様を「天の父よ」と呼ぶことができるようになります。どんな時にも、この方が私どもの父であることを信じる事ができるようにあります。聖霊に導かれて、私どもは主イエスを見いだすことができるのです。

(七月二三日礼拝説教要旨)